

本発表では、フランスの哲学者ジル・ドゥルーズ(1925-1995)が絵画と音楽という二つの芸術をどのように捉えていたのかを考察する。その際、画家フランシス・ベーコン論である『感覚の論理』(1981)においてドゥルーズが言及する、両芸術の差異を考察の出発点とする。当該の議論の独自性は、絵画と音楽をそれぞれ「ヒステリー」と「分裂症」という二つの症例と比較して論じる点にある。この議論は「精神分析」というドゥルーズの中でも重要な位置を占める分野と繋がりを持ち、「器官なき身体」といった主要な概念と芸術との関わりを考察することを可能とする。

『感覚の論理』第七章「ヒステリー」において、ドゥルーズは、絵画と「ヒステリー」、音楽と「分裂症」について比較考察をする。そこで「ヒステリー」は本質的に「遅れ」と関係するとされる。身体の捻れや痙攣としての「ヒステリー」は「現実に在ること」からの遅れを生じさせるのである。ベーコンの絵画に特徴的に見られるように、「ヒステリー」は有機体としての器官を歪ませ、極度に物質的である肉体の形象を開示する。つまり、絵画は「器官なき身体」という「身体の純粹現前性」を眼にみえるものとするのである。一方の音楽は、身体から肉体的・物質性を取り除き、身体を抽象化することで「音的身体」を形成するとされる。音楽は、これによって「純粹現前性」を解放する。このような特性を持つ音楽は「ギャロップの分裂症」と対照される。このように、絵画と音楽には、身体という素材を物質化するか、脱物質化(抽象化)するかという大きな差異が存在することが分かる。

以上の議論を踏まえ、本発表では「精神分析」や「器官なき身体」、或いは「分裂症」について多くの考察がなされる、精神分析医フェリックス・ガタリ(1930-1992)との共著『アンチオイディプス』(1972)及び『千のプラトー』(1980)へと考察を進める。ここでは、両芸術における二つの身体性について「緯度」及び「経度」といった地理学由来の概念に注目しつつ論じる。「緯度」とは、速さと遅さの関係のもとで身体に所属する物質的要素を、「経度」とは身体が受け入れる強度的情動の総体を指す。両芸術と身体性との間の関係についての考察は、両芸術を「死」という根本的問題に接続することを可能とする。ドゥルーズにおいて「器官なき身体」は「死のモデル」とされる他、音楽は「悦びのうちに死を感じさせる」芸術として捉えられており、芸術と「死」は密接な関係にあると考えられる。これまで、ドゥルーズにおける芸術論は「リトルネロ」概念や、「知覚不能なものを知覚可能にする」といったテーゼを中心に読解するものが主であった。対する本発表は、以上のように、症例や身体性、「死」といったテーマ群を経由しつつ、ドゥルーズにおける絵画と音楽が持つ差異性を明らかとするだろう。